2022年6月5日 礼拝メッセージ

聖書:ルカの福音書13章22～30節
説教:狭い門から入りなさい

はじめに

24節の「狭い門から入るように努めなさい」というみことばは、よく知られていて、入試のシーズンになると「競争率○○倍の狭き門」というような言い方をします。あるクリスチャンの方から、簡単な道と困難な道の二つの選択肢から選ばなければならないような時、このみことばを思い起こし、あえて困難な道を選んだという証しを聞いたことがあります。では、いつもそうしろということか。極端な例を挙げますと、山に登る時二つのルートがあったとします。一つは初心者向けでもう一つは上級者向け。自分は初心者なのに、狭き門から入れというので上級者コースを選ぶのか。もしそんなことをしたら周りに大きな迷惑をかけることになりますから、自分のレベルにあったほうを選びます。そうすると「狭い門から入りなさい」という意味は、今まで考えていたのとちょっと違うのかもしれない。これからそのことを考えてまいります。

１　たとえ

１）戸を閉める

ことの発端は、ある人がイエスに「主よ、救われる人は少ないのですか」と尋ねたところから始まります。これに対してイエスは「狭い門から入るように努めなさい」と語ってから、一つのたとえ話をします。25節。「家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってから、あなたがたが外に立って戸をたたき始め、『ご主人様、開けてください』と言っても、主人は、『おまえたちがどこの者か、私は知らない』と答えるでしょう。」

家の戸がいつも開いているだろうと、のんきに構えていた人たちは、門が閉じられて入り損ねてしまう。そこで戸の外にいる人たちはこう訴えます。26節。「私たちは、あなたの面前で食べたり飲んだりいたしました。また、あなたは私たちの大通りでお教えくださいました。」しかし主人はこう言う。27節。「おまえたちがどこの者か、私は知らない。不義を行う者たち、みな私から離れて行け。」

今は物騒な時代ですから、見ず知らずの人が来たら、用心して戸を開けないで警戒するようになってきました。でもこの人たちは、一緒に食事もしたこともあるし、主人が大通りで教えていた時には、それを聞いていた。まんざら知らない仲ではなかった。それなのに、「私は知らない」と言って外に放り出す。あまりに冷たいようにも感じます。

たとえ話は、神の真理をわかりやすく説明するためのお話しです。ここに出てくる家の主人や外に放り出された人たち、開けられていた戸がいつか固く閉じられていく、これらのことは何かを象徴していて、すべては救いに関係しています。もうお気づきかと思いますが、家の主人は神さまで、家というのは神の国のこと。その神の国には誰でもが入れるのではなく、戸が閉じられてしまう時が来る。そうなったらもう誰も入れない。そういう話しだということは理解できるでしょう。

そこで気になるのは、自分は神の国に入れるのかどうかです。もしかして自分は入れなくて外に放り出され、泣いて歯ぎしりしてしまうのか。急に不安になってしまう。

２）二つの弁解

これは切実な問題です。なぜ、彼らは扉を開けてもらえなかったのか。よく考えないといけません。注目したいのは、この人たちがなんと言ったのかです。26節で彼らは二つのことを言っています。一つ目は、「あなたの面前で食べたり飲んだりした。」二つ目は「あなたは大通りでお教えくださいました。」この二つのことを根拠にして、家の主人と自分はつながりがある、それで戸を開けてもらう資格があると訴えています。ところが家の主人はこう言う。「おまえたちがどこの者か、私は知らない。不義を行う者たち、みな私から離れて行け。」

一緒に食事をするほど親しい関係だったはずなのに、「おまえたちのことを私は知らない」と言って追い返す。神は非常に冷酷なのでしょうか。結論から言います。安心してください。そんなことはない。では、家の主人はどうして戸を開けないのか。きちんとした理由があるはずです。

２　パリサイ人がイエスを食事に招く（14章）

１）安息日問題

そこでどうするか。少し先取りしてしまうのですが、14章に入るとイエスがパリサイ派のある指導者の家に招かれて食事をする場面が出てきます。

そこと今日の箇所につながりがあります。14章で何が起きたのか。イエスが食事に招かれたのは安息日でした。そこに水腫を患っていた人が座っていたのをご覧になったイエスは、皆の前で癒やします。前回も、イエスが安息日に十八年腰の曲がった女性を癒やして大変な騒動が起こりましたが、ここでもそうです。パリサイ派の人たちは，安息日には緊急でない限り、人を癒やしてはならないと教えていました。癒やすという行為は仕事に該当して、モーセの安息日の規定に触れる、というのが彼らの言い分でした。そういうことを教えている人たちの目の前で、安息日であるにもかかわらず病人を癒やすのですから、面目丸つぶれとはこのことで、当然腹を立てる。それで、イエスをどうやって殺そうかという相談をし始めていく。それが14章で起きていく出来事です。

２）イエスを憎む

さきほどのたとえ話で、戸が閉じられてしまって家の中には入れなくなった人たちは、「あなたと一緒に食事をしたではありませんか」と訴えていました。しかし、パリサイ派の人たちは、確かにイエスと一緒に食事をしています。けれども親しい交わりがあったのではなく、まるっきり正反対で、イエスへの憎しみが燃え上がっていく。そういう食事だった。そんなわけですから、「あなたと一緒に食事をした」と訴えても、家の主人が戸を開けようとしないのは当然で、主人が冷たかったのではない。彼らの態度そのものに原因があったのです。

３）あなたは教えておられた

外に閉め出された人たちの二つ目の訴えについてはどうでしょう。「あなたは私たちの大通りでお教えくださいました。」やはり14章とのつながりで考えてみましょう。食事の席についたときイエスの前に水腫を患っている人が座っていました。そこでイエスはこのように尋ねます。14章３節「イエスは、律法の専門家たちやパリサイ人たちに対して、『安息日に癒やすのは律法にかなっているでしょうか、いないでしょうか』と言われた。」この質問に対して、律法の専門家やパリサイ人たちは黙って答えません。イエスが水腫の人を癒やした後で、もう一度尋ねます。14章５節。「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者が、あなたがたのうちにいるでしょうか。」それでも、彼らは答えない。

外に閉め出された人たちは、「あなたは私たちの大通りで教えておられた」と訴えていました。「大通り」と訳されていることばは「広場」とか、人のたくさんいるところという意味です。イエスが食事に招かれた時、そこに集まっている大勢の人たちに神の真理を語ったことは事実です。彼らは嘘は言っていない。では、イエスが教えておられたことを聞いて、彼らは自分の間違いを認めたのか。いま見たように認めようとしなかった。安息日だからといって病人を癒やしてはならない。誰が見ても明らかにおかしいことなのに、自分たちは正しいと言い張り、かえってイエスを憎んでいった。

これでおわかりでしょう。外に閉め出された人たちがあんなに訴えたのに、家の主人がどうして戸を開けようとしなかったのか。やはり神が冷たいのではありません。イエスが折角人々の前で、神の真理を教えてくださっていたのに、それを聞こうとせず、自分の罪を認めようとしなかった人たちの側の問題だったのです。

３　救いの門をくぐる

１）救いの門は広いのに

イエスは「狭い門から入るように努めなさい」と言われました。最後に、その意味について確認しておきます。最初にも触れたように、二つの選択肢があったら難しい方を選ぶ、ということではありません。また、神の国に入る扉は、非常に狭くてそこを通り抜けることのできる人は非常に少ない、という意味でもない。もしそうなら、痩せている人が有利という笑い話になります。

イエスのことばはいつもそうですが、意外な落とし穴が仕掛けられていると感じます。狭い門と聞くと高校や大学の入学試験のように、最初から高いハードルが設定されていて、そこを飛び越えなければならない。そんなイメージを抱きます。その考え方は捨ててください。通り抜けなければならない門が狭いか広いか、誰が決めるのか。私たちは、てっきり神が決めると思っていませんでしたか。そうではない、決めているのは私たちのほうなのです。こういうことです。

そもそも救いの道を備えてくださったのは誰ですか。もちろんイエス・キリストです。十字架の死とよみがえりによって備えられた救いの道は、最初から狭かったのか。そんなことはない。神の子がいのちを捨てて備えてくださった救いの門です。一人でも多くの人を救おう通されているのですから非常に広い門のはずです。極端かも知れませんが、

門の柱と柱の間の距離を測るのが難しいほど広いのではないか。私はそう思います。

２）自分の手で狭くする

　それなのにどうして狭いというのか。パリサイ人たちを見てください。イエスが、何度も質問して自分の間違い、罪に気がつくようにと丁寧に導いてくださったのに、それでも頑なに認めようとしない。そうしますと狭くしているのは誰か。自分のほうなのです。ただ一言、自分は間違っていた。今まで自分は完全に正しいと思い込み、人を傷つけ、神に逆らっていた。そう認めるだけで救いの門をくぐることができたのに認めません。自分の間違いを認めること、罪人であると認めることはたいやなことです。できれば避けたい。一人で通りなさいと言うのならなおさら恐ろしい。しかし私たちは一人で通れといわれているのではない。イエスと言う方が一緒に通ってくださる。ですから私たちは、私たちのうちにある罪に目を留め続けていきたいと願います。